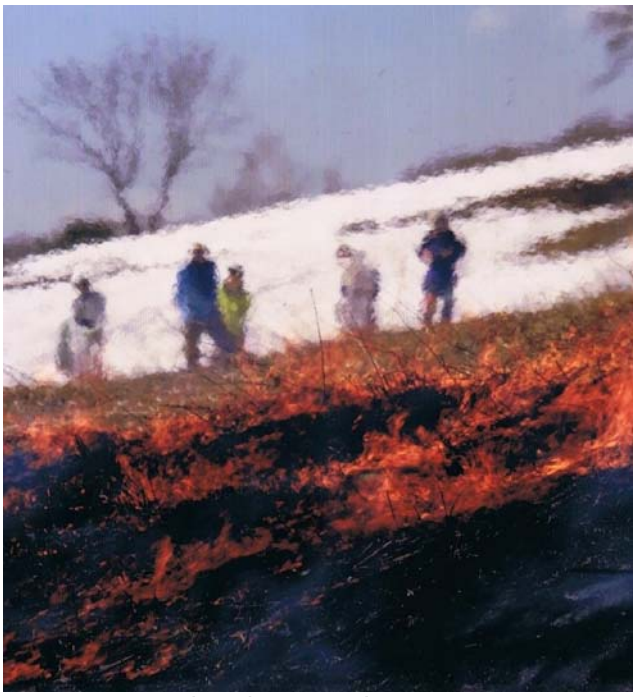
http://commonf.net　E-Mail:jimukyoku@commonf.net

茅風

— Breeze from the field of thatch-grass —

2015年5月22日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信 45号



上ノ原の野焼き（撮影　林良雄）

■ 1月～4月の活動報告（事務局）・・・・・・・・・・・・・・・・・1
■ 第14回定期総会開催報告(事務局)　・・・・・・・・・・・・・2
◆新年度執行体制
◆新年度の主な活動計画・日程（コラム　車座講座）
◇総会セミナー報告（米山正寛）
「ゆめは茅野を」海老沢秀夫
■一般参加歓迎プログラム 2014⑦「雪原トレッキング」・・4
◇参加者レポート（岡村直樹）
■流域連携と流域コモンズ活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
◇理窓公園湿地再生（5）
◇小貝川と菅生沼の野焼き(6)
◇渡良瀬遊水地野焼き（7）
■一般参加歓迎プログラム 2015①・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
「茅野の野焼きと早春の里山散策」
◇参加者レポート（田村健・平原俊・石井清一郎・上原健）
■藤原の“ほっと”ショットコーナー（中村智子）　・・・・・・・11
■「スケッチ・オブ・ワンダー」を終えて（高野史郎）・・・・・12
■藤原現地報告（北山郁人）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
■野守のつぶやき（清水英毅）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
編集後記　（敬称略）

■ 1月～4月の活動報告

【 1月 】

●24日　東京楽習会③「小貝川の野焼き」に11名参加。 翌25日に実施された「菅生沼の野焼き」には3名参加。6頁参照

【 2月 】

●8日　理科大「理窓自然公園」の湿地再生 PJTに参加。 まず、20メートル四方を草刈り、引き続き翌週の15日には池作りを実施。それぞれ総勢40名、当塾から各4名、5名が参加。5・6頁参照

●11日　上毛新聞のコラム「北毛発　雪と生きる」に北山塾頭が写真入りで登場。利根源流の魅力発信、自然・田舎体験による誘客活動が紹介される。

【3月】

●7日、8日　一般参加歓迎プログラム⑦「雪原かんじき散策」 を7名の参加で実施。7日の夜には、のらえもんの子供たちを含めて、車座講座「冬芽観察のポイント」を実施。4・5頁参照

●22日　渡良瀬遊水地の葦原での1700haの野焼きを清水顧問が視察、「渡良瀬遊水池を守る利根川流域住民協議会」と交流。7頁参照

【4月】

●4日　第14回の定期総会開催。①2014度事業報告及び事業収支　②2015年度事業計画及び事業収支予算案　③2015年度役員選任　④会則の改定　の4議案をいずれも全員賛成で可決。2頁参照

●同日、総会終了後、森林文化協会「グリーンパワー」元編集長で当塾会員の海老沢秀夫氏から、琵琶湖近辺の里山での活動状況について講演。3・4頁参照

●12日　3月に野焼を行った、渡良瀬湿地再生実験地での生き物調べに清水顧問、西村会員が参加。「渡良瀬遊水池を守る利根川流域住民協議会」の事務局長らに、利根川流域コモンズ交流活動を提案。

●15日　事務所を東京都中央区から浦安市に移転。 2頁参照

●22日　プレック山崎氏による上ノ原の昆虫リストを受領。12目138科683種確認、西村幹事の解説とともにホームページ（「活動実績」タグ － 調査事業 － フィールド調査）にアップ。

●25日　2015年度①回目の一般参加歓迎プログラム「茅場野焼きと早春の里山散策」を実施。7～9頁参照

（以上）

■第14回「定期総会」開催報告
新年度活動計画・日程とセミナー

皆さまのお力添えによって発足14年を迎えることができた当塾は、去る4月4日に、東京都渋谷区の環境パートナーシッププラザ・セミナースペースにおいて、第14回定期総会を開催いたしました。昨年の総会で新執行体制が誕生して1年が経過し、この間、草野塾長を中心に「継続は宝」との思いで、みなかみ町での活動の充実を図りつつ、運営基盤の強化を図ってきました。今回、幹事団の大枠は変わりませんが、新幹事に若手の西村大志会員が就任し、さらなる活動の充実を図ることとしました。皆様方には森林塾青水の活動に、引き続きお力添えを賜りますようお願い申上げます。

◆新年度執行体制
～顧問・幹事・オブザーバーの紹介

塾　長
　草野　洋：全般統轄
塾　頭
　*北山郁人：全般統括補佐、みなかみ事務所長、古民家再生・活用、奥利根ネット他
幹事
　浅　川　　潔：事務局長
　稲　　貴　夫：「茅風」編集長、東京楽習会他
　岡田伊佐子：婦人部代表、自然ふれあい学習他
　高野　史郎：学監、自然ふれあい学習他
　古高利男：コラボ／自然観察会「のらえもん」他
　増井太樹：事業統括（流域コモンズ・連携促進他）
　西村大志：事業統括補佐（流域コモンズ・連携促進他）
　松澤英喜：事務局長補佐（発信活動促進、会員管理、HP、助成事業他）
　*吉野一幸：地元代表、NPO奥利根ネットワーク、古民家活用・交流促進他）
　米山正寛：コラボ／森林文化協会、発信活動拡充他
監事
　林部良治：会　計（年会費、経理統括）

顧問
　原剛、安楽勝彦、笹岡達男、滑志田隆、清水英毅

オブザーバー　／　相談役
　*木博晴彦：行政／みなかみ町役場窓口（観光課自然観光グループ）
　*林親男：地元／「上ノ原運営協議会」窓口（藤原案内人クラブ）
　川端英雄：株主会員代表／大目付

青字は新任役員　＊印はみなか町在住の役員です。

◆2015年度の主な活動計画・日程

総会では2014年度の事業報告並びに事業収支が承認されるともに、2015年度の事業計画並びに予算案が可決されました。主な事業計画及び行事開催日は次の通りです。参加のご案内は、行事開催日の約一カ月前を目途にお送りいたしますので、ご予定を調節のうえ、ご参加をお願いいたします。

月	主な行事（一般参加歓迎プログラム・東京楽習会等）
4	・定例活動①山の口開き・野焼き/25（土）・26（日）
5	・第1回東京楽習会「スケッチ・オブ・ワンダー」/9(土) ・麗澤学園樹木観察会/23（土）
6	・定例活動②初夏の古道散策・山菜教室・奥利根水源の森探訪/13（土）・14（日） ・茅株移植、計測/未定
7	・麗澤中奥利根水源の森ﾌｨｰﾙﾄﾞﾜｰｸ/３(金) ・定例活動③防火帯刈払い、草原・古道散策/11(土)・12(日)
8	・夏の生き物調/未定 ・第２回東京楽習会（山本会員・水の話）/22日（土）
9	・定例活動④ミズナラ林整備/12（土）・13（日） ＊オプション企画日光茅ボッチの会茅場見学/13(日)・14(月)
10	・定例活動⑤茅刈/24（土）・25（日）
11	・定例活動⑥山の口終い・茅出し・茅スグリ試行/14（土）、15（日）
12	・第３回東京楽習会（山崎講師・昆虫の話）/12日（土）
1	・流域活動：小貝川、菅生沼の野焼きに参加/未定
2	・流域活動：東京理科大野田キャンパス理窓公園での湿地保全活動に参加/未定
3	・定例活動⑦キャンドルナイト＆雪原トレッキング/12（土）・13（日）
通年：茅生育モニタリング、外来種駆除、NPO奥利根ネット側面支援、地域貢献活動、車座講座の実施、連携団体への上ノ原来訪・利用働きかけ	

◆会則（事務局住所）の改定
事務局（東京事務所）の住所変更に伴い、会則が改定されました。新しい住所は、次の通りです。

＊千葉県浦安市高洲５－２－１－１０１１
コミュニティデザイン気付

「車座講座」を始めました　　草野　洋

今年の定例活動は、一般参加歓迎プログラムとして「野焼き」を皮切りに6月には「草原の山菜とブナ新緑の森林」など月 1 回のペースで予定されています**(年間計画参照)**。

今年の活動の目玉として、夜の交流会のとき、その時々の季節やプログラムに合った話題を提供する「車座講座」を行うことにしております。

昨年のプログラムの振り返りを行った際、「活動に関係する知識など講座的なものをやれないか」との要望を受けて、参加に付加価値をつけようと「車座講座」としてお酒やお茶を飲みながらざっくばらんな雰囲気でパワーポイントなどを使った講座を行うことにしました。

そのお試しとして、3 月の雪中トレッキングでは草野が制作した「冬芽観察のポイント」のパワーポイントを上映しました。4 月の野焼きの際には、今年の第 1 弾を増井さんが「全国の野焼きあれこれ」として、北海道から阿蘇までの野焼きの状況に合わせてその目的などを解説しました。6 月の活動では「藤原の山菜とおいしい食べ方(仮称)」を民宿のおかみさんに語っていただく予定です。このほか、「植物調査のポイント」「茅葺文化」「藤原冬語り」「森林と水」などのように、季節の話題や活動内容を補足できるものにしたいと考えています。演者は、藤原の古老や山や樹木に詳しい方、会員にお願いすることにしております。

一味違った今年のプログラムにご期待ください。

セミナー報告 「ゆめは茅野を～琵琶湖の西の里山報告」 講師:海老沢秀夫(NPO法人麻生里山センター理事)　　報告者・米山正寛

講師は当塾の元幹事で、今は滋賀県琵琶湖西岸の高島市朽木地区で暮らしておられる。東京を離れてから2年間、地区の内外における活動の展開について、興味深い報告を受けた。

朽木地区は、2005年に周辺の5町1村が合併して高島市となるまでは、朽木村という一つの自治体だった。車で琵琶湖まで約30分かかる山間の地であるが、若狭湾に面した福井県小浜市まで約45分、京都市街までは1時間半ほどの距離にある。かつては、若狭から京都まで荷を運んだ鯖街道の要衝として栄え、歴史上は海と山の文化が融合し合う地でもあった場所だ。

ここには、かつて講師が勤務していた朝日新聞社の森林環境基地「朝日の森」が設置されていた。基地の閉鎖に伴って市へ移管された森は現在、「森林公園・くつきの森」として市民に親しまれている。定年退職により東京での勤務を終えて朽木に帰った講師は、森の管理運営を市から委託された麻生里山センターの理事として、再びこの面積約150haの森を活動拠点とするようになった。

朽木地区の植物相の特徴は、暖温帯と冷温帯の境界付近に位置するという立地から、日本海側と太平洋側の要素が入り混じった種の多様性の高さにある。ウラジロガシ、ヤブツバキ、モミなど暖かい地域の木と、ブナやシナノキ、ナナカマドなど寒い地域の木が一緒に生えている景観は、他の地域ではなかなか見られない。

かつては、こうした野山が薪炭林(カナギ山)、アカマツ林(マツ山)、スギ林(天然山)、肥料用採草地(ホトラ山)、ススキ草原(カヤバシ)といった用途ごとに場所を分けて利用されていた。くつきの森も、古い航空写真などを見ると、多くが草原として利用されていたようだ。やがて、草原や周辺農地にはスギが植林されるようになり、今では十分な手入れの行き届かないまま放置されたスギ人工林が目立つようになっている。くつきの森では、こうした人工林をもう一度コナラやクヌギの雑木林に、あるいは草原に戻すことを目標に、森の再生、利用にも取り組んでいるという。

ただ、全国的に問題となっているシカによる植物の食害は、こうした取り組みの阻害要因として無視できない状態にある。人工林の伐採跡地には、明るい環境を求める多くの植物が入ってくるが、食害を受けた結果として、シカが好まないアセビやワラビ、ススキなどの植物ばかりが残っている。本来豊かな植物相が成立する土地に、単調な植物相が現れてしまうのは、生態系被害と呼んでも間違いではないだろう。樹木も、明るい環境を好む陽樹の中でシカが食べない種類が優占的に繁茂しており、特に中国原産の外来種であるニワウルシが目立つようになっている。

こんな中で、講師の言葉を借りれば、地区の人々はみな今や「シカ戦争」に「徴兵」されている状態にある。被害対策として農地にフェンスを張るようになったが、資材は行政から提供されても設置や日常の管理は全て集落ごとにやらねばならない。講師が住む戸数10戸の小さな集落では、80歳代の古老を先頭に協力し合って作業を進めている。また、集落の各戸には組頭や井係、会計などの仕事が回ってくるほか、用水路の掃除や水道水源の管理なども協力して実施している。そんな中で、集落内の耕作放棄地を野焼きしたり、刈り取った茅を雪囲いや箒に利用したりと、新しい動きを演出することに、ちょっとした楽しみを感じているのが、講師の日常であるようだ。

このほか、2年前に東京から朽木まで中山道を歩いて戻った講師がこだわっているのが、各地に残された古い道をたどる活動である。NPOで働く仲間と結成した「朽木フットパス研究会」は、琵琶湖一周をはじめ、村内の古道や日本海側と太平洋側とを隔てる分水嶺の道の踏破などに挑戦を続けている。その延長線上の活動として、村内にある「信長の隠れ岩」など伝説の地を訪ねる散歩マップの整備にも乗り出したそうだ。さらには四国八十八カ所、熊野古道の巡礼も手掛け始めており、今後は韓国・済州島オルレ（「家に帰る細い道」の意味）のようなコースをめぐる海外遠征も目指すのだという。

「森林塾青水と藤原でやったことをなぞっているだけ」と謙遜して語った講師ではあったが、幅広く地域に貢献する活動を2年のうちに積み重ねてきた実践報告に、多くの参加者が驚きを覚えながら聞き入った。

■一般参加プログラム⑦「雪原トレッキング」開催報告 ＆ 参加者レポート

本年度最後となるこのプログラムには、草野塾長以下会員、会友七名が参加しました。

一日目は古民家の雪ほりの前に倉庫の雪ほりをしました。雪原トレッキングで使うスノーシューやかんじきなどを格納してある倉庫が、雪に埋まっていたためですが、30分ほどでシャッター前と道路側を除雪し、用具を取り出しました。一汗かいたので、昼飯も美味しくいただけました。

昼食後は、古民家の雪ほりです。玄関のある正面は雪が軒先まであり、一部は屋根まで繋がっています。軒下には雪囲いがありますが、ガラス戸に雪が迫っています。正面玄関側をスコップで掘りながら、ほり出した雪を道路側まで運びたすという作業を続けました。

古民家と離れの間に溜まった雪は、二、三メートル飛ばさなくてはなりませんが、鯉の一本釣りのようにスコップを振り上げて、雪を放り投げる離れ業も登場しました。約2時間の作業で正面の雪を除けて中の様子を確認し、雪ほり作業を終えました。

一、二、の　三で雪を飛ばす

その日は夕食後、宿で草野塾長による車座講座です。同日程で藤原を訪れていたのらえもんの子供たちも参加して、プロジェクターによる画像や、トチなどの冬芽の実物を見ながら冬芽観察のポイントを学びました。

大幽の案内板と最後の急坂

二日目はいよいよ雪原トレッキング。途中、樹木の冬芽を観察しながら雪原を歩きました。大幽洞窟までの最後の50メートルは急な登りですが、最後の力を振り絞り、出発から約二時間の行程で到着。たくさんの氷筍が、神秘的な姿で我々を待っていてくれました。

洞窟内の神秘的な氷筍

青水のメンバーは全員が雪原トレッキングに参加。郷土料理の「ボタ」は、のらえもんの皆さんに作っていただいたものを美味しく頂戴しました。味噌と胡桃のバランスが何とも言えませんでした。

藤原には三月に入っても2メートルを超える雪があります。それが少しずつ融けて、下流に住む人々の暮らしを支えています。冬の藤原も、雪原トレッキングも初めての経験で、期待と不安が織り交ざった二日間でしたが、様々な発見がありました。メンバー及び藤原の皆さまに感謝いたします。（稲　記）

森林塾原稿

岡村　直樹

岡村さんには、2012年度の第一回東京楽習会で、「利根川を歩く」のテーマでお話をいただきました。日本旅行作家協会の会員で全国にある109の一級水系を徒歩と公共交通機関のみで踏破したという「川の旅人」です。今回、青水の行事に参加し、藤原を再訪してみたいという希望がかない、感想をお寄せいただきました。（編集子）

二、三年前、森林塾「青水」の皆様の前でお話をする機会を与えられた際、「飲水思源」なる故事成語を理念として活動されていることを教えていただきました。さらに塾のフィールドが、利根川の源流域となっている群馬県みなかみ町の藤原地区であることも知り、何かの折に藤原へ同行したいものと念じていたのでした。

熱望していた機会が訪れたのは、三月七、八日のことです。以前に二、三度、藤原を訪れたのは春と秋でしたので、今度は是非とも水源地域の冬を体験したいと

思ったのです。

上越新幹線の上毛高原駅と上越線水上駅に七名が集合し、草野洋塾長が運転するレンタカーで藤原をめざしました。市街地ではさほどでもなかった雪の量がみるみる増して、屋根に積もった雪に押しつぶされた家も望見できます。藤原湖のダムサイトは氷に閉ざされています。東京では梅の花が散りはじめ、啓蟄(けいちつ)も過ぎたというのに、藤原はいまだ冬の装いのままです。

今宵の宿となる民宿・並木山荘での昼食もそこそこに、一畝田(いっせだ)集落の古民家に向かいました。ここで雪掘りを体験するのです。

住む人のない古民家は、屋根の庇まですっぽり雪に埋もれています。この民家を塾の活動拠点の一つにするとかで、玄関前の雪を取り除くのが目的です。分担を決めて作業にかかったのですが、未経験の悲しさ、さっぱりハカがゆきません。どうにかこうにか出入りできるだけのスペースを確保したころには、全身汗みずくです。かまくらや雪像づくりも予定されていたのですが、すでに余力は残っていませんでした。

その夜は、のらえもんの親子も加わっての交流会です。車座になった人々を前に、草野塾長が冬芽観察のポイントをレクチャーします。厳しい冬を生き延びようとする樹木の、したたかな戦略に驚きました。人間も、木々と同じ生き物のはずですが、便利な都会暮らしに慣れきって、本来備わっていたはずの生きる知恵を退化させてしまったのかもしれません。

しばし木々の知恵を咀嚼(そしゃく)していますと、さらなる感動に遭遇したのです。一年前、埼玉県浦和市から移住してきた吉澤拓也さんのお嬢さん・志乃ちゃんが、水上小学校の校歌を披露してくれたのです。

♪水のふるさと／利根川に／清き流れの／たゆみなく／わきたつ希望／意気高し…

小学校一年生らしい澄んだ歌声に、大いにこころ動かされました。われわれ東京都民は、利根川の恵みなくして生きてゆくことはできないでしょう。日頃飲んでいる水の源に暮らす人々への敬意を忘れてはなるまい、との思いを新たにし、塾が「飲水思源」を理念に掲げていることの意味をも痛感しました。

さて、翌日。私にとっては、生まれてはじめての雪原トレッキングです。西洋かんじきともいうべきスノーシューを履いて、武尊(ほたか)山の胎内に秘められた大幽洞窟をめざします。二時間ほどの行程でしたが、何とか落伍せずに付いていけたのは半ばぐらいまで。ゼーゼーあえぐばかりで、こわばりきった筋肉がいうことをききません。少し歩いては休み、また歩を進めます。大幽洞窟が今回の目的ですから、あきらめるわけにはいきません。死力をつくして最後の急勾配を登りきり、ようよう洞窟に達しました。

いやー、疲れた―というのが素直な気持ちではありますが、疲労困憊のなかにも一筋の光明を見出しました。次なる機会が楽しみになってきました。

■流域連携と流域コモンズ活動報告

今号より、利根川流域での他団体との連携による活動をまとめて報告します。ご期待ください。(編集子)

◇流域連携や流域コモンズは実践で・・・ 利根運河河畔の湿地再生活動　草野　洋

森林塾青水は、利根川つながりでの流域連携「流域コモンズ」を目指して活動しています。

もちろん、メインの活動は、利根川水源域のみなかみ町藤原上ノ原の茅場とミズナラ林ですが、その活動趣旨を水源域から発信して同じ上中下流が連携して環境保全活動を継続した大きな力にしていくという趣旨の旗を活動方針の中で掲げています。

このことは、2013年の「全国草原サミットinみなかみ」の中でも水源地帯や草原の恵みを享受するには上下流連携が重要であるとするサミット宣言が採択されました。しかし、その理念は分かっていても実践となると正直言って難しく、これまで、これといった形に残る実績はありませんでした。

ところが、昨年頃から利根川下流域の団体との繋がりの足がかりができ、今年もそのチャンネルが増えています。その一つが青水の会員等に案内して小貝川、菅生沼の野焼きに参加していることです。主催者の西廣先生や小幡さんは上ノ原の野焼きを応援頂いています。

小貝川、菅生沼に加え今年は、千葉県野田市・利根運河沿いの東京理科大理窓公園で、2月8、15日に行われた湿地再生にも、2日間で述べ10名が参加しました。この活動は、40年間放置されてきた湿田を再生してナマズやウナギなどの魚類や水生昆虫などの生息地を作ろうとするもので、将来はコウノトリの放鳥も視野に入れ、利根川運河との魚道の設置も計画されています。

湿地再生に向けて、刈り払い（2月8日）

湿地再生に参加の皆さん（2月8日）

私たちにとって初めての経験でかなりな重労働でしたが、その明確な目的達成のために作業をする学生さんとの共同作業を楽しく行いました。

このような活動の際にはできるだけ、「飲水思源」のマーク付きの青水メットをかぶって参加して塾を PR するようにしています。

このほか、東洋大学の学生のフィールド受入れもあって、流域連携が形になりつつあります。

このように、流域連携や流域コモンズというスローガン的なものは、あまり、大上段に構えずに、一つ一つの実践として形にしていきたいと考えています。

◇小貝川と菅生沼の野焼き　　稲　貴夫

小貝川の野焼き　本年度第三回東京楽習会として、昨年に引き続き、1月24日に開催された「小貝川の野焼き」に参加しました。

地元茨城県水海道市の「水海道自然友の会」が主催し、青水でもおなじみの茨城県自然博物館の小幡先生、岐阜大学の津田先生、東邦大学の西廣先生をはじめ研究者やボランティア団体等の支援、協力により、タチスミレやヒメアマナ等の草原固有の植物を保全することを目的に毎年開催されています。今年の参加者は約七十名で、森林塾青水のメンバー十名も加わり、レーキや熊手を使って防火帯の整備に汗を流しました。

今回も昨年と同じ場所三ヶ所に火を入れました。野焼きの二日前の雨が降り、燃え具合が気になるところでした。丈の高い茅が生い茂る一カ所目は、風の具合で燃え残りも出ましたが、比較的良く焼けました。二カ所目、三カ所目は火のまわりが悪いため、燃え残りの草を刈り集めて火を入れ、草地の保全が図られました。

菅生沼の野焼き　翌２５日、茨城県自然博物館が稀少植物の生育環境を守るために、博物館の立地する菅生沼で実施している自然観察会「野焼きがタチスミレを救う」にも、青水の有志が約１４０名の地元関係者やボランティアとともに参加しました。

野焼きの意義や実施方法、同時に行う火入れ地の温度測定実験について、前日の小貝川でもお世話になった小幡さん、津田さんよりレクチャーを受けるとともに、全員で防火帯の整備や周辺の清掃を行いました。そしていよいよ火入れです。現場は十文字状の防火帯で四カ所に区切られ、順番に火を入れてゆきました。

この日も風の穏やかな晴天で絶好の野焼き日和でした。雨の影響も余り感じられず、火は順調に燃え広がってゆきました。

途中で風が変化したためか燃え残しが出ましたが、そこは手慣れたもので、残った草を刈り払った後に再び火を入れ、目的を達成しました。野焼きはお天気任せの部分が大きいですが、前日は雨と湿り気、この日は風との関係を実感しました。

◇渡良瀬遊水地は「地域丸ごと博物館」！
～ヨシ焼き見学と生きもの調査に参加して～

清水　英毅

かねて念願の渡良瀬遊水地を、この春2回も訪ねることができた。最初は3月 22 日、遊水地利用組合連絡会などが中心になって行われたヨシ焼きの見学。（写真右）

二度目はそれから 3 週間後の4月 12 日。西村幹事と共に、渡良瀬遊水池を守る利根川流域住民協議会による湿地再生実験地「生きもの調査」に一般参加。（写真左下）いずれも、同協議会の猿山弘子事務局長ならびに川俣将世先生にお願いして、ご懇篤なるご案内ご指導を賜った。帰路、谷中湖の散策がてら湖北にひっそり佇む谷中村史跡を見学。（写真右下） 国策に翻弄された村民と田中正造翁の苦難苦汁を偲びつつ、福島原発事故の背景と現状に思いを馳せざるを得なかった。

遊水地は 2012 年、協議会の長年の努力が結実しラムサール条約登録湿地になった。その目的は足尾鉱毒事件の歴史的遺産たる遊水地を守りつつ、ゆたかな自然生態系を活かすこと。そのために、協議会は次なる活動目標としてエコミュージアム「自然と歴史の野外博物館」構想を提唱している。猿山先生たちは、何かと障害が多くまだまだ道半ばと仰っておられたが、小生は「訪問者の目線次第で、既に地域丸ごと博物館になっている」と実感した。同時に、当方より提案しご賛同いただいた「利根川流域コモンズ」交流活動が博物館構想の具体化にも資するのではないか、など愚考した次第。

今年のヨシ焼き見物者は、1 万 2 千人に達したと聞き及んだ。その一人でも多くに、火入れの目的、効用さらには地元や協議会の思いを理解し協働してもらう方策など共に考えてみたいもの。

「真の文明は　山を荒らさず川を荒らさず　村を破らず人を殺さざるべし」

田中正造翁の言葉を記して中間報告の筆をおきたい。

■一般参加歓迎プログラム 2015①
「茅野の野焼きと早春の里山散策」
開催報告 ＆ 参加者レポート

今年度の最初の行事は、まだ雪の残る上ノ原での野焼きです。塾長の顛末記と、参加者からの感想及び上ノ原の野焼きと早春の藤原を題材にした俳句で報告します。（編集子）

2015 野焼顛末記　　草野　洋

2015 年の野焼は、4 月 25 日に実施されました。

今年の冬は、厳しく、フィールドのある藤原上ノ原の積雪は記録をとりはじめてから新記録となりました。したがって雪解けも遅く、4月初旬の低温が続いたときには実施日の延期も考えました。

しかし、5月初めの異常乾燥には2013年に中止に追い込まれたトラウマがあります。参加者の応募状況も順調で日程変更は気が進みません。長期予想によれば4月第３週当たりから平年並みの気温になるとの予想を信じ、除雪箇所を集中して行うことで可能との賭けにも似た判断で準備に取り掛かりました。

はじまりの式

したがって、除雪は昨年よりも日数、費用が多くなりましたが前日入りの 4 月 24 日には何とか実施できる状況となりました。幸いに天気は晴れが続くようです。それでも、これまでの野焼に比べて小規模で迫力のない野焼になるだろうと予想していました。

当日11時30分、首都圏からの参加者45名に、みなかみ町長をはじめ、利根沼田森林管理署長など10名地元の協力者など8名、消防車と消防団６名が

１年の安全を祈って山の口開け神事

残雪が多い上ノ原に集まりました。北山塾頭の仕切りで、「はじまりの式」、増井幹事の「野焼の効果」、今年１年の安全を祈って「山の口開け」神事を行い、参加者には野焼箇所のタニウツギなどの侵入木除伐を１時間ほどやってもらいました。

いよいよ、野焼本番ですが、当初は４か所の除雪エリアごとに参加者を配置し一斉に着火する予定でしたが、各エリアが狭いので順番にやっていこうとの北山塾頭のアイデアを受けて、手前のエリアから阿部聡一郎さんの指導の下、各エリアを全員で焼くことにしました。結果的にこれが功を奏して比較的迫力のある野焼ができ参加者も満足していたようです。

第一エリアに着火

着火は14時10分。気温が高く、乾燥していたので、例年の野焼に劣らぬ、ススキがはじける音がして、白い煙が青い空に立ち昇り、野焼風も手伝い時には大きな炎が上がり参加者の「おお～」という歓声がたびたび上がります。

残雪が多いおかげでエリアの周りはすべて白い雪、赤い炎、白い煙、真っ黒な焼跡、今年もこの野焼風景が楽しめました。鎮火は15時。

温度計に火が迫る

野焼エリアには、岐阜大学の津田研究室が温度計やカメラを設置してデータをとってもらい、その動画は夜の車座鋼材で披露され、迫力ある炎が再現さしました。

煙でかすみ野焼らしい風景

野焼風に火勢がまして

その日の宿は、吉野屋さん、除雪から送迎まで本当にお世話になりました。

夜は、岐阜大学大学院生でもある増井幹事の車座講座です。タイトルは、「全国の野焼あれこれ」、北海道から阿蘇まで全国の野焼の目的と実態をパワーポイントや動画で紹介し解説してもらいました。昼間、野焼を体験した参加者は野焼の意義ややり方について理解が深くなったようでした。そして、この日の野焼の動画の上映でカメラの保護ガラスが熱で割れるシーンの迫力に息をのんでいました。

今年の野焼の悩みは、例年より多い残雪です。上ノ原の周りも集落も期待していたスプリングエフェメラルの開花には早く、見るべきものがありません。2 日目のプログラムをどうしようかと前日に北山さんと検討して、スキー場の中を通る道路から集落や山脈を眺め、青木沢集落まで歩くコースを急遽決めました。皆さんに満足いただけるかどうか心配でしたが、お天気に恵まれたこと、木々の芽吹に春の息吹が感じられたこと、雪が固くしまり、あまり体験できない堅雪歩きができたことで予想に反して好評でした。

スキー場ゲレンデからの集落と山脈の眺め

青木沢への下り道

青木沢集落では鯉のぼりが一同を迎えるなど春の里山風景が楽しめ、立ち寄った諏訪神社では、エンレイソウとキクザキイチゲが出迎えてくれました。

藤原には、その時その時で素晴らしいタカラがあります。知らない、感じないだけかもしれません。藤原再発見の 2 日間でした。

今年も、無事野焼が終わりました。津田先生からは「日本一安全な野焼」とのお墨付き？をいただきました。協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。これで今年もいい茅が育ち、人と生き物がにぎわう上ノ原になることでしょう。

茅場焼きに参加して

田村　健

森林塾清水会員の皆様、初めまして。茅場焼きでご一緒させて頂いた皆様、その節はありがとうございました。私は群馬県の玉村町（県内では平野部）から、今回の茅場焼きに 1 泊 2 日の日程で、参加させて頂きました。

私は、2年程前に「里山資本主義」や「森と日本人の1500年」などの著作を読んで、環境問題や森林保全・里山問題などに興味を持ちました。去年、群馬県で実施している「エコ・カレッジ」という環境教育のプログラムに参加しました。そこで、県内の森林保全に、NPO 等のボランティアの方々が活躍をされているのを知りました。その後も、機会があれば、「自然観察会」や「探鳥の会」、「巨樹・古木ツアー」等にも参加しておりました。今回の茅場焼きは、最近よく利用している、群馬県森林ボランティア支援センター「モリノワ」のサイトで知りました。

4月25日の茅場焼きの当日、上毛高原駅から上ノ原入会の森の現地に向かう道中の、車窓の景色は、だんだんと雪深くなり、冬に逆戻りをしているような感がありました。地元では既に桜も散っていたので、同じ群馬県でも場所によってずい分違うなと思いました。途中、カモシカも見ました。当日は空の深い青が印象に残る快晴でした。野焼きの現地は雪が想像以上に残っており、例年より 20 日ほど雪解けが遅いとのことでした。背後の山の樹木もやっと芽吹き始めたようでした。野焼きの場所は雪の中を4か所に分け除雪してあり、飛び火の心配は無さそうでした。野焼きの規模は小さいとのことでしたが、周囲の雪景色とのコントラストが美しく、印象的でした。夜の車座講座は、お酒を飲みながらの楽しい講義で、野焼きの効用や全国の野焼きの状況を学ぶことができました。大変、勉強になりました。渡良瀬遊水の野焼きを見に行こうかと思いました。

翌日の26日も晴天に恵まれ、北山さんの案内で山林内を散策し、冬山で生活する動物の痕跡などを教えてもらいました。諏訪神社では、入会の森の茅を使った茅葺の建物を見ることが出来ました。神社の境内では、“エンメイソウ”や“アズマイチゲ”、“キクザキイチゲ”などが咲いていました。楽しく有意義な2日間でした。

茅刈りなど他の行事にも参加できればと思いますので、今後とも宜しくお願いします。

藤原で感じたこと

平原　俊

はじめまして。私は東京農工大学の大学院で社会人学生をしています。研究テーマを一言で説明するのはなかなか難しいのですが、森林や里山などの自然資源に対して、人間が今後どのようにかかわっていくのが望ましいのか、日々考えています。

私が森林塾青水の活動を知ったのは、『グリーン・エージ』という雑誌に前塾長の清水さんが書かれた活動紹介記事でした。そこには、以前、青水がつくったという「現代版入会慣行」が掲載されていました。

最近、里山ボランティアのような活動は都市近郊でも多く見られるようになったと思います。それらのフィールドは、程度の差こそあれども、旧来のムラの共有地に由来するところが多いのではないでしょうか。

しかし、活動する市民団体がそのことを意識していることはほとんどありません。そんななか、活動開始当初から「コモンズ」や「入会」といった概念を強く意識していることが伝わってくる清水さんの文章はとても新鮮に感じられました。このような理由で、私は以前から青水の活動が気になり、時折ホームページを眺めるなどしていました。

さて、前置きが長くなりましたが、4月下旬、私は青水が活動する藤原をはじめて訪れることができました。そこで見たはじめての野焼きはとても美しいものでした。

行きの車中、塾長の草野さんからは今年は残雪の影響で例年よりも小規模だと聞いていたのですが、雪のなかの野焼きの風景は絵になり、雪の白と焼き跡の黒のコントラストが青空の下でよく映えていました。

また、周囲の林も表情豊かな様子が肌で伝わってくるもので、また別の季節に訪れたいと感じさせるものでした。

帰りの車中、草野さんから初参加の感想を聞かれました。少し考えた後で、「楽しかったです」という月並みの感想しか言えなかった自分が大変恥ずかしかったのですが、それが率直な感想でした。

訪れる前は、初参加、新幹線の移動、泊りがけといった要素に少し気おくれしていたところもあったのですが、藤原の素晴らしい自然を満喫し、帰りには「これがレクリエーションか」というようなことを考えながら随分と元気になっていたのでした。

俳句「利根の山焼き」

石井清一郎

遠嶺に
　雪のパノラマ
　　谷さくら

鳶の輪の
　雪解山河を
　　恋ひて舞ふ

集ふ人
　つけし山火や
　　疾く走る

今昔の
　　色変わらず
　　山焼けり

嶺よりの
　風音清（すが）し
　　末黒野（すぐろの）に

山焼きの
　終へし雪原
　　生気噴く

過疎の地に
　里山統べて
　　鯉のぼり

雪解水
　蒼き彩（あや）なし
　　利根に入る

藤原地区で見聞きした鳥…２０１５年春

上原　健

今年こそはススキ草原の野焼きをこの目で見てみたい、と一昨年のリベンジを期してやって来た藤原ですが、残雪たっぷりでびっくり。焼ける場所は草原の一角に限られていましたので、ああっ今年も望み薄か、と少々落胆してしまいました。でも火が放たれると炎は地を舐めるように広がって見事に枯れススキを一掃し、それを見て爽快な気分になりました。

とりあえず当初の目的を果たしたので、次の興味、関心は早春の植物や鳥。宿に到着すると、取るものもとりあえず、間邊さんを誘って夕食までの時間、宿の近くを歩いてみることにしました。藤原での動植物ウォッチング、実は野焼きに負けず劣らず楽しみにしてきたのです。二日目の早朝にも楽しませていただきました。

季節の移ろいは例年より20日は遅れているのではないかということで、早春の植物のラインナップはまだ揃っていませんでしたが、キクザキイチゲやヤマエンゴサクなど、私の住む横浜では出会うことが難しい美しい花があちこちに咲いていてわくわくしました。一方バードウォッチングの方も端境期で期待できないと半分諦めていたのですが、日頃の行いが良いのと藤原の自然が豊かなお陰で、思った以上に楽しむことができました。

中でも二日目の朝、西村さん、米山さん、間邊さんと間近に見たハイタカのハンティングは印象深いものでした。ホオジロがよく止まるお気に入りの木を見ている時、どこからか現れたハイタカが襲撃、一斉に飛び立つホオジロ。逃げる一羽の背にハイタカの爪が一瞬かかったものの、しっかり捕まえることができなかったのか、失敗。朝食を獲り逃したハイタカはそのまま森の中へと消えていきました。こんな場面が私たちの目の前で繰り広げられたのですから大興奮でした。

そんなドラマチックな場面の前には、クロツグミが明るく複雑な節回しの囀りと端正な姿を披露してくれました。クロツグミはトップクラスの歌い手として知られた夏鳥、嬉しい出会いでした。他に確認できた夏鳥は、ニュウナイスズメ、オオルリ、センダイムシクイ、ツバメ。ミソサザイは冬にも藤原に留まっているのか、平地に移動しているのか、地元の方に聞いてみないとわかりませんが、日本最小クラスの小さな姿で轟々と雪解け水が流れる川音に負けない大音量で囀っていました。日本三鳴鳥のひとつ、オオルリは集落の周りでは見かけることはできませんでしたが、ゲレンデを横断する絶景ポイントで囀りとともにその姿を見ることができました。この絶景ポイントには2本の白樺の木にヤドリギが付いていましたが、ヒレンジャクとかキレンジャクの糞から芽生えたものかもしれません。

トビ、カケス、キセキレイ、ハクセキレイ、モズ、アオジ、ホオジロ、メジロ、ヒガラ、シジュウカラ、は藤原で一年中見られる留鳥でしょうか。ドラミングしていたキツツキはアオゲラか、それともアカゲラ？ひょっとしてオオアカゲラ？居残っていた冬鳥はカシラダカ、大声で鳴いていたガビチョウは日本全国で勢力拡大中の中国産の外来種です。

こうして名前を挙げてみると、日本中どこにでもいるヒヨドリ、ムクドリ、スズメの名前がないですね。ニュウナイスズメはたくさんいたのにスズメは見かけた記憶がありません。ヒヨドリ、ムクドリも集落では見なかったような…藤原湖の辺りには普通にいたのに、ちょっと不思議な感じです。

この他にもその姿を思い浮かべることがなかった囀りもいくつかありましたので、もっと多くの野鳥が生息していることは確かです。探鳥地としての魅力を再確認できた藤原での二日間でした。

（残念ながら鳥の写真はありませんが、興味がある鳥についてはネットで検索して、姿や囀りを確認してみてください。）

■藤原の“ほっと”ショット・コーナー⑨
中村　智子

地元・中村智子さんの、見てほっとする“ほっと”ショット・コーナー。今号も藤原の豊かな自然を象徴するような、動物の写真で特集していただきました。（編集子）

3月10日雪のチラつく中、マヒワが、白樺の芽を啄ばんでいました。

4月22日家の前の畑にカモシカの親子が現れました。
こどものカモシカ、とても可愛い！

5月5日、明るいうちから、子どもが巣にいるのか、餌を探し回るホンドタヌキ。

4月14日近くの杉林で、アオゲラのカップルが、仲良く飛び回っていました。

4月28日、西公園の水芭蕉の池から、コガモが一斉に飛び立ちました。桜が満開でした。

4月19日、藤原湖にシラサギがいました。アオサギは多く飛来しますが、シラサギは、初めて見ました。

■セミナー「スケッチ・オブ・ワンダー」 を終えて

高野　史郎

5月9日に今年度の第一回東京楽習会として、本会幹事の高野さんを講師に、朝日新聞本社の読者ホールでセミナーを開催しました。このセミナーは、高野さんが森林文化協会の機関誌「グリーン・パワー」に連載してきた植物スケッチと解説「スケッチ・オブ・ワンダー」の連載100回を記念し、同協会の共催、朝日新聞社の後援をいただいて、会員外の一般方々にも呼び掛けて開催したものです。セミナーを終えた高野さんからお寄せいただいた我々へのメッセージを掲載します。（編集子）

朝日読者ホールでのスケッチ・オブ・ワンダーのセミナーでは、大勢の方々に大変お世話になり、ありがとうございました。4月3日の朝日新聞に掲載されてから、申し込みが殺到し、お断りする状態となって慌てました。

地元などでの観察会・環境講座などでは、大体の顔ぶれが予想できます。ところが今回は、何を期待されて申し込まれたのか、まったく見当がつきません。たぶん、米山さんが作られたらしいキャッチコピー「描くことで分かる植物の生きざま」が、読む人のハートを打ち抜いたのでしょう！

参加希望された方々は、植物に関心があるのか、いつも絵を描いているのか、その両方のつながりを気にしていた人なのか？

観察会などでいつも困るのは、「毒キノコは、どういうつもりで毒をもっているんです？」などと、真面目な顔でこっちに正解を求めてくること。おかしいです。私はキノコ語を知らない。全能の神様なんかじゃ、全然ないんですから。

講師役の人の説明を素直に鵜呑みするのではなく、自分で自然の不思議に気がついて、イメージを膨らませ、キラキラと輝いてほしいといつも願っています。

いま各地で、生物多様性の基本計画づくりがあわただしい！　でも、ちょっと変なのです。過去の歴史を調べたり、将来の社会情勢に思いをめぐらして、人と生き物との関係を悩みながら考えたりする人が全然いない！　それで 2050 年に向けての長期計画、などとプランをひねり出すのは異常な神経です。終日パソコンにしがみついていて、現場に行くのをためらう人が増えている。外へ出て、何を見たらいいのかがわからないらしい。

だから、「遺伝子の多様性」とか、「生態系サービス」などという言葉が、消化不良のまま計画書にラレツされるんです。

お腹をすかせたタコが、仕方なく自分の足をかじっても、そっくりそのまま足に再生されるんじゃなくて、分子数の少ないものにまで消化分解して、そこから各組織に再分配するんだよなどと説明するのですが。

というわけで、この地球に生命が誕生してからの生物進化の歴史とか、環境教育との関わりとか、市民活動のこと、そんなことを書き出したら途方もない方向に展開してしまいました。重くなりすぎる！

そこで、振り出しに戻って、グリーンパワーに掲載されたスケッチを中心に話題を絞ろうとなったわけでした。あれでよかったのでしょうか？

とかく文科系と理科系とに分けて考えられがちですが、KJ法で知られる川喜田二郎さんは、「野外科学のすすめ」の中で、文化人類学などでの調査経験を踏まえ、「書斎と実験室とに二分して考える習慣があるけれど、基本的な考え方も予算規模も違う。そのどちらにも属さないのが野外科学の領域だ」とおっしゃっています。

公害問題が騒がしかった時代に、化学系の出身者が大量に採用されて、役所の環境部に配属されました。大気汚染や水質調査の専門家たちです。それがそのまま役所の環境部関係の部署の主流派となって自然環境も扱う。こうした環境専門家は、試験管レベルで考える習慣が身についているから、将来どういう要素が互いに干渉しながら働いて、今の予測とはまったく違った結果が起こるかもしれない、という自然の仕組みがまったく理解されないようなのです。

そして、その人たち、団塊の世代が次々と定年退職し、気がついたら、後ろにはバトンタッチする人材が誰も育っていなかった！　という感じが切実です。

生命誌研究館の中村桂子館長は「科学者が人間であること」（岩波新書）の中で、世の学識経験者が、自分の領域だけに留まって、バランスの取れた生活感情をなくしてしまっていることを嘆いています。宮沢賢治さんや南方熊楠さんの活動を改めて学びたいといっています。

今回のセミナーを通して、老骨に鞭打って！もう1回若返らないといけないナを実感しています。ともあれ、終わってホッとしました。いろいろと、ありがとうございました。

会場に展示されたスケッチに見入る来場者

■藤原現地報告
メープルシロップ作りに挑戦　北山　郁人

日本のカエデの仲間でもメープルシロップを作ることができます。今回はイタヤカエデから樹液を採取する仕掛けを取り付けました。

スパイルというカナダ製の専用ノズルを木に開けた穴に打ち込み、ビニールパイプを取り付け、タンクにたまるようにしました。日中の気温が10℃ぐらいになると樹液を枝先に送り始めます。

多い日には1日で2リットル以上樹液がでました。2日間でイタヤカエデ3本に仕掛けたタンクには、なんと13リットルも樹液が溜まっていました。3月初旬は、気温が低くく、最高気温で5℃ぐらいですが、木の内部では春の準備が進んでいるようです。

スパイルという専用のノズルを木に打ち込むのですが、種類によって、樹液の出かたにかなり差がありました。1日で2リットル溜まっているものと、同じ木でも全く溜まっていないものがあり、まだまだ研究の余地がたくさんあります。

こうして集めた樹液を 40 分の1ぐらいになるまで煮詰めます。1リットルのメイプルシロップを作るのに40リットルの樹液が必要です。生の樹液は糖度が2度あり、ほんのり甘くてそのままでもおいしいです。これを糖度66度まで濃縮していきます。

今回は、5本のイタヤカエデから約120リットルの樹液を採ることができました。それを薪ストーブで約40分の1の量まで煮詰め、約3リットルのメープルシロップができました。とってもすっきりとした甘さのものができました。色も出始めの樹液のため、ふつうよく目にするメイプルシロップと違って、薄い黄色です。後の樹液になると色が濃く、くせが強くなるそうです。

森林塾青水　協賛団体のご紹介

森林塾青水は、設立当初よりご理解、ご支援をいただいている「みなかみ町」をはじめ、下記をはじめとする様々な団体からの支援のもとに活動しています。次号より、これらの団体の中からいくつかを誌面にて紹介してゆく予定です。

- ○小荒井製菓
- ○源泉湯の宿　松の井
- ○（有）大国館
- ○（株）東洋プロセス
- ○（株）ホテル辰巳館
- ○ホテルサンバード
- ○（株）町田工業
- ○水上高原リゾート
- ○麗澤中学・高等学校

（アイウエオ順、敬称略）

いつもご支援、ご協力いただいている皆さまに、心より感謝申し上げます。

■野守のつぶやき(4) 冬から春へ、里山讃歌

清水　英毅

●雪の青木沢峠かんじきトレッキング　厳冬２月 11 日。川端、古高両兄と雪の青木沢峠行。シルバーならぬプラチナトリオ、ストックなしのカンジキで足取りも軽く(？)

登ること90分程で標高 890 ﾒｰﾄﾙの山頂へ。途中、複数の熊棚や真新しい爪痕、カモシカのため糞、キツネの足跡などに遭遇。「嗚呼、ここらも彼ら先住民の縄張りなのだ」など感慨深く思いつつ、尾根筋のけもの道で一服。古高さんご持参のウキスキーの旨かったこと。それにしても、地元の皆さんにとっては厄介者のこの雪が首都の水需要を賄ってくれているのだ。感謝の気持ちを込めたブランド・ウイスキー『飲水思源』など出来ないものか！

●大自然の恵み、メープルシロップ作り　2月28日。日光茅ボッチの会・飯村代表にご示唆いただいたメープルシロップ作りに着手。手始めに北山さんと、惣一朗さん純一さんお立会いの下、「樹林」「吉野屋」裏山のイタヤカエデの大木4本に、合計８本のスパイル（樹液吸引器）とペットボトルを装着。翌朝、見にゆくと概ね順調に採取が進み，中には既に2ℓ入りボトルに満タン状態も。調子に乗って3月８日には、仁三郎さんのご理解を得て「高嶺」裏山でも採取開始。3月末までに合計120ℓの原液を採取、これを煮詰めて3ℓのシロップを得ることができた。試飲をしていただいた皆さん「爽やかでやさしい自然の甘味！」と大好評。採取時期の早期化や煮詰め方など、改善課題を残したが、イタヤカエデは集落のどこにでもある自然の「宝もの」。眠れる地域資源の循環型利用の道を、地元の皆さんと協働しつつ探っていきたいもの。

●渡良瀬遊水地は「地域丸ごと博物館」！　3月22日。かねて念願のヨシ焼き見学の機会を得た。さらに4月12日、「渡良瀬遊水池を守る利根川流域住民協議会」の湿地再生実験地「生きもの調査」にも参加。いずれも、西廣先生ご紹介の同協議会・猿山事務局長と川俣先生にご懇篤なるご指導を賜った。遊水地は同会の長年の努力をもって2012年、ラムサール条約登録湿地になった。その目的は足尾鉱毒事件の歴史遺産たる遊水地を守りつつ、ゆたかな生態系を活かすこと。そのため、次なる目標としてエコミュージアム「自然と歴史の野外博物館」構想を提唱されている。先生たちは、まだまだ道半ばと仰っておられたが、小生は「訪問者の目線次第で、既に立派な博物館」と実感。同時に、当方より提案しご賛同いただいた「流域コモンズ」による交流活動そのものが同構想具体化に資するものでは、など愚考。利根川水系の生物多様性ホットスポットとキーパーソンを繋ぐ流域コモンズ。遊水地は、その中核エリアになり得るのでは！#

●嬉しいこと沢山あった野焼き　今年は想像を絶する残雪で執行部は大変だったが、無料送迎バスなしでも大勢の参加者を得て無事かつ成功裡に終了。他にも、嬉しいことが数々あった。①地元消防団のお出ましを頂けたこと。昔で言えば「青年団員」が一幸団長以下 6 名も参加してくれた。中には次期団長・真人さんも。頼もしい限りだった！②初参加の学生ｋさんから「野焼き開始の動機を詳しく」とか、大学院生 h さんからは「入会やコモンズについてもっと知りたい」など別途ヒアリングの要請を受けたこと。③勤め人時代からの大恩人お三方をご案内、「来て、良かった。野焼きの意味が良く分かった。地元の皆さんとの長きにわたる協働作業の積み上げが素晴らしい」などのご感想。些かなりとも「飲水思源」ご恩返しの真似事が出来たのかも、と面映ゆくも嬉しいことであった。

●「野守」の次なる愉しみ　来る6月１日～2日。多葉田、古高両兄と藤原行を予定。野焼きから一月余、上ノ原の草花の生育ぶりは？野鳥観察に山菜刈り、そして「天音の滝」の流れや如何？　などなど、藤原の精霊たちとの語らいを心ゆくまで愉しみたいもの。

平成27年5月朔日（青）

～編集後記～

「茅風通信」第４５号をお届けします。

今号は野焼き特集です。今年の野焼きも、準備から終了まで、様々な発見がありました。

また、今月開催したセミナー「スケッチ・オブ・ワンダー」終了後、講師の本会幹事・高野史郎さんからメッセージが寄せられ、今号に掲載しました。自然との向き合い方を考えさせられます。

「茅風通信」は、流域をつなぐ情報誌を目指しています。皆様からの情報やご意見をお待ちしています。（編集子）